
ただそれだけの話

タムラカエデ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただそれだけの話

【Nコード】

N0108V

【作者名】

タムラカエデ

【あらすじ】

それはありふれた日常。

そして崩れゆく日常。

それは剣と魔法が織成す幻想の世界。
そして魔族に脅かされる幻想の世界。

訪れるのは、望まれた召喚と望まなかった召喚。

これはそんな物語。

ありふれた日常から異世界へと召喚される　ただそれだけの話。

prologue (前書き)

ただそれだけの話修正・再構成についてのお詫び。

どうもこんにちは、タムラカエデです。ご愛読して頂いてる皆さんには申し訳ないのですが、このたび私目の勝手な都合で本編を修正、再構成させて頂きました。

内容はちよっとした修正だったり、丸々再構成だったりともう本当に申し訳ありません。

今後はこのようなことが無いようによく練り、よく考え筆を進めて生きたいと思えますので、どうかこれからも末永くよろしくお願ひいたします。

手前勝手ですが、ご理解、ご容赦いただけたら幸いです。

早速丸々変わっております。

プロローグ以降、修正を行いしだい、順次更新していきます。

prologue

夢を見ていた。

それはもう、自分でも夢だと解かってしまう位の夢。

夢の中で俺は、家族で食卓を囲み、友人たちとくだらない話で笑いあい、無様に命乞いをする親の仇の、苦痛と恐怖で醜悪に歪んだ顔をナイフで滅多刺しにして……。

そんな、まるで夢のような夢を

「 輩、先輩！先輩！！」

いつそ鼓膜をぶち破ってしまいたい程の大音量で、泣き叫ぶような声が耳に入ってくる。

御陰様で夢から引き摺り下ろされた俺は、軽く動かせる程度の体の自由を得た。

だがしかし、自由に動ける現実リアルより束縛された夢の方が良いに決まっている。時と場合にもよるが、今回は間違いなく後者だ。

まあつまるところ、俺はまだ起きたくない訳で。

可愛らしい声の主には悪いが、また夢の中に入り込

「先輩！お願いだから目を覚まして！！先輩……お願いだよ……
…ひっく。」

ませてはくれないようだ。

クソツタレ、泣くか叫ぶかどっちかにしてくれ 出来れば黙って
くれ。ついでに体を揺さぶるのも止めてくれ。

えらく庇護欲をそえられるような声を出したって無駄だ。フェミニスト精神っていうのはそれなりの服を着て始めて発揮されるって知ってたか？

そして残念な事に俺は今パジャマだ。なら、言わなくったって分かるだろ？

寝間着のフェミニストがいるって信じてるなら、御愁傷様。神様を信じる方がまだマシだ。

ベッドの上じゃあ野郎はどいつもこいつも獣なんだ。送りは狼、ベッドじゃライオン。クソツタレな世の中だ。

そういう訳で、理解したんなら他所を当たってくれ。理解してないんなら、俺じゃなくて隣の部屋の馬鹿を叩き起こして食われちまえ尻軽女。

「うう……えぐ、ひっく。せんぱあい………」

ああ、チクシヨウ。

頼むよ、何時に無く良い夢を見たんだ。最高に素晴らしい、イッチまいそつな位の夢を見たんだよ。

だいたい部屋には鍵を掛けて置いた筈だ。どうやって入ってきたんだ、警察呼ぶぞ。

とか何とか思いつつ、無視して布団を被り直そうとしたが……どうにも布団の感触が無い。

もしかして掛け布団は引っぱがされたのだろうか。おいおい、勘弁してくれ。もう10月も終わりかけだっていうのに毛布一つも無いなんて凍死してしまう。

よくよく考えてみれば、背中感触もいつもと違って硬く冷たい。ベッドから引き摺り下ろされた可能性もある。

冷たいといえば、肌に触れる空気もそうだ。確か窓はちゃんと閉めたはずなんだが。

どうせ体を揺さぶってくるこの女のせいだろう。きっとそうだ。そうに違いない。

クソツタレ、見てろよ、今は無きアルカトラズの囚人たちも裸足で逃げ出すぐらいのどぎついお灸を据えてやる。

「
」

薄っすらと目を開ける。

薄暗くて、あまり周りが見えない。チクショウ、まだ夜じゃないか。いい度胸だ、この糞女クソアマしばき倒して肥溜めにぶち込んでやる

「……先輩？先輩！気が付いたんですか先輩！！」

薄っすらと開けただけなのに、もう女に気付かれた。

声が聞こえた次の瞬間には、涙で顔をくしゃくしゃにした女の子の顔がドアップで目に映る。

見慣れた黒いツインテールの女の子。親友の大切な妹。自

分にとつても妹のような大事な後輩。

……ああ、何をやってるんだ俺は。

先程まで心の内に抱いていた罵詈雑言が裸足で逃げ出す。顔に落ちる彼女の涙のおかげで、冷や水をぶっ掛けられたかのように夢見心地だったおめでたい頭が覚醒する。

ともかくにも、まずは泣いている彼女を安心させないと

「

先輩？まだ体動かしちゃ駄目です！せんぱ

」

大丈夫だと、そう伝えられるくらいには笑うことが出来たのだろうか。

体を起こそうとする俺を必死に彼女が止めようとしたが、そういう訳にもいかないだろう。

どれだけ寝ていたのか、体の節々が痛い。そのせいで、起き上がろうにも体をうまく動かすことが出来ない。

無理やり体を捻り動かしながら、首を回して周囲を見る。うまい具合に後ろに瓦礫があったので、何とか体をずり動かしながら、瓦礫に凭れ掛かるようにして上体を起こした。

「

自然と、一仕事終えたような息が口から漏れる。

……なんてザマだ。上半身一つ起こすだけでも、芋虫みたいに動いて大きな溜息が出る程の重労働。

大丈夫だと醜く笑ってみたのはいいものの、目の前でじっと見ていた後輩にこうも心配そうな顔をされては先輩も形無しだ。

今なお、心配そうに俺の顔色を窺う少女。目を真っ赤に泣き腫らし、顔も涙で濡らし。いつもの可愛らしい笑顔は見る影も無い……
ああ、まったく。酷い顔だ。

……俺のせい、だろう。それ以外に思い浮かばない。
どれだけ寝ていて、どれだけ泣かせたのだろうか。
今更ながらに、安心させようとして彼女の頭に右手を伸ばす。

「
」

伸ばした筈の腕は、彼女に届かなかった。

不思議に思っただけで右腕に視線をやると、肘より少し上から手の中指に至るまでの部分が丸々無くなっていて。彼女がしてくれたのだから、喪失部には包帯代わりの布が巻かれている。

思い出したかのように、ズキリと鈍い痛みが腕を襲う。が、不思議と腕を無くしたにしては大した事が無い痛みだった。包帯代わりの布は真っ赤に染まっているが、血はもう流れていない。止まったのだろうか……止まるものなのだろうか。今はどうでもいい事のように思えた。

「……あ、先輩、その、腕、腕なんですけど……」

俺の視線に気付いたのか、少女が説明しようとしてしどろもどろに口を開く。

せつかく泣き止んだと思ったのに、また目元に涙を浮かべて、次第に嗚咽交じりになって。

それに、澄んだような可愛らしい普段の彼女の綺麗な声は、ずっと泣いていたためなのか擦れていた。

ズキリ、と腕が痛む。

チクシヨウ、また泣かれては堪らない。泣いて欲しくない。気にするなよ、腕一つぶっ飛んだところでどうって事無い。いやどうって事あるけど、今は本当にどうでもいい。

チラリと左腕に視線をやる。有難い事に、どうやらこっちは健在らしい。軽く力を入れてみたが、問題なく動く。OK。

そしてそのまま左腕を伸ばして、目の前で泣きそうな彼女の背中に腕を回し、体を無理やり自分の方へ引っ張り込むようにして抱きしめた。

驚くほど簡単に、彼女はすっぽりと腕の中に納まった。突然のことに驚いたのか、言葉を無くした彼女はどうしていいのかわからず此方を見る。

ああ、それでいい。泣かないのなら、なんでもいい。

それにしても、よかった。本当に、ああ、本当に

「 無事で、良かった。」

「 あ。」

結局、彼女を泣かせてしまった。

胸の中で、糸が切れたように咽び泣く少女。安心させてあげる事は出来たのだろうか。まあ、気の済むまで放って置こう。

ズキリ、と腕が痛む。

それよりも、いい加減状況を整理しなければいけない。

何が、一体、どうなっているのか。

情けない話、どういうわけか記憶がすっぱりと抜け落ちている。意識こそはつきりしているものの、正直まだ夢の中にいるような感じが否めない。矛盾している。

痛みはある。確かに今俺はここに居るというのに、どこか地に足が着かないというか、現実味が無いというか。まあ、目が覚めてみれば右腕がぶっ飛んでるわ、服を汚した後輩はわんわん泣いているわで、理解できないのも当たり前だが、そういう訳にもいかないだろう。

腕の中で泣いている彼女に聞くのが一番手っ取り早いけど、今はどうにも気が進まない。

ズキリ、と腕が痛む。

落ち着かせるように少女の背中をさすりながら、周囲の様子を見る。

目が慣れたからなのか、はたまた最初からそうだったのか。少し遠くまでなら見渡せるくらいには明るかった。が、正直真っ暗な方がマシだった。ああ、チクシヨウ。

瓦礫、瓦礫、瓦礫、瓦礫、瓦礫、瓦礫、ととにかく瓦礫が目映った。

大きいものから小さなものまで何でも取り揃えてございますとでも言いたげな、元が何だったのか分かる筈も無い建築業者涙目の瓦礫の百貨店。

割れたり陥没したりと散々な道路の上には、転倒したり、潰れた

り、燃えたりという元車。電柱や標識も倒れたりへし折れたりして散らかつていたり、無事なものを見つける方が難しい惨状。

あわや崩壊を免れた建物も、ガラスが割れてるだけならまだいい方で、何階層かから上が倒れてたり、ガスの爆発か何かで燃えていたり酷い有様だ。

ズキリ、と腕が痛む。

ああ、神よ チクシヨウが くらばりやがれ
ジーザス・ガツテム・ファツキンベイバー。

危づく口ずさんでしまいそうな罰当たりな言葉が思い浮かんだ。誰でもこんな状況に放り出されたら文句の一つでも言いたくなる。まあ、カミサマは懐が深いから黙って便器に流してくれる事を切に願いたいところだが、そのところどうなんですかと、この状況に現実逃避したくなって空を見上げる。

……そしてすぐに後悔した。クソツタレ、足にコンクリの固まり縛り付けて肥溜めにぶち込んでやる。

何の冗談か、見上げた空には月が二つあった。

雲も星も無い、吸い込まれそうな虚空で禍々しく光る紅と蒼の月。頭がクラリとした。

ズキリ、と腕が痛む。

……どういふ事だ。月のウサギは無邪気に餅ついて黄な粉で食べるおめでたい奴らじゃなかったのか。

一体何時からトマティーナ派と海水浴派に分裂してやがる。いいご身分だな、誰に断って趣味を変えたんだチクシヨウ。

くだらない。

あおいつきのうさぎたち。みんなでたのしくかいすいよく。つかれてもどこにもあがれない。みんなおぼれてしんじやった。つきはかなしくてないている。

あかいつきのうさぎたち。みんなでたのしくとまとまつり。つぶれたとまとはうさぎたち。みんなつぶれてしんじやった。つきはおこつてないている。

本当に、くだらない。

月を見ている内に頭がおかしくなったのか、碌でもないことを考えてしまった。

ズキリ、と腕が痛む。

軽く頭を振って、視線を落とす。

少女はしゃくりあげたような泣き声をたまに出す程度までには落ち着いたようだ。

だが状況は依然として変わらない。街は散々。月は二つ。さて、どうしたものか。

ズキリ、と腕が痛む。

そもそも此処は何処なのか。何故後輩がここに居るのか。なぜ彼女と二人きりなのか。アイツはどうしたのか。

ズキリ、と腕が痛む。

俺は家で寝ていた？違う、彼女の服も俺の服も私服。そう、出かけてたんだ。アイツと三人で。俺たちは街で一緒に歩いていた。

激しい腕の痛みとともに、抜けていた記憶が甦る。

「先輩！？やっぱり腕」

「椎名ちゃん。」

苦痛に顔を歪めてしまった俺に驚いて彼女が声を掛けてくるが、彼女の名を呼ぶことでそれを遮る。

ああ、認めよう。逃げていた。知るのが怖かった。でも何よりも始めに聞かなければいけない事だった。

「椎名ちゃん　正義は何処だ。」

尋ねたのは、一緒に居た善の親友の安否。彼女の兄の所在。

それは、突然の出来事だった。

事を終え、俺と椎名ちゃんと正義は街を歩いていた。特に目指す場所も無く、ただ歩いているだけだった。

すると、正義が突然何か聞こえると言い出し、足を止めた。不審に思っていると、俺にも、椎名ちゃんにも、街を歩いていた人にも、歌うような声が聞こえてきた。

それを皮切りにしたように、地面が揺れ始め、それに気をとられているうちに次第に揺れは大きくなっていった。

どこか安全な所に逃げようとした時には、遅かった。正義の足元に円形の幾何学的な発光した模様が浮かび上がり、正義がその魔法陣に似た円から外に出ることが出来なかった。

収まるどころかますます大きくなる揺れ。逃げ惑う人々の叫び声。ガラスの割れる音。鳴り響く車のクラクション。爆発音。

刻一刻と酷くなる状況の中で、パニックになり半泣きの椎名ちゃ

んと、どうにかして正義を引きずり出そうとする俺に、アイツは逃げると諦めたような笑いを浮かべた。

そんなアイツにどうしようもなくムカついて、悪足掻きするようにアイツの腕を掴んで、アイツも俺の腕を掴んで。何とか腕だけでも円の外に引き出して、そのまま体も引っ張り出そうとして。いつの間にか周りは夜になったかのように暗くて。魔法陣が眩しい位に発光して。アイツは椎名ちゃんを任せるなんてふざけた事抜かして。

激しい痛みが腕を襲うのと同時に光が全てを包み込み、一瞬浮遊したかのような感覚の後 視界は暗転した。

「椎名ちゃん、正義は何処に居るんだ。」

俯いて答えない椎名ちゃんにもう一度聞く。
ふざけるな。何で答えないんだ。近くに居たんだからすぐ答えられる筈だろ。

「答えろ！椎名！！」

いい加減鬱陶しい腕の痛みと苛立ちが相俟って、つい声を荒げってしまう。

肩をびくりと震わせた椎名ちゃんに少しばかり罪悪感に責められたが、すぐに消えていった。

「……知らないです。」

「嘘だ。」

躊躇いがちに出された言葉をすぐに否定する。

そんな筈無い。あるものか。俺はアイツの腕を掴んだ。アイツも俺の腕も掴んだ。なら近くに居る筈だ。

「気が付いたら、先輩が倒れてて、先輩の腕が無くて、血がいっぱい出てて……。服を破って手に巻いたけどすぐには血が止まらなくて、うっ、先輩は全然起きなくて、怖くて、でもお兄ちゃんも全然来なくて、ひっく。」

「……もういい、もうたくさんだ。」

次第に涙声になっていく椎名ちゃん。また泣かれてはたまったものじゃないので、彼女を押し退けて立ち上がる。

片腕が無いせいでよろけるが、どうでもよかった。押し退けられた椎名ちゃんが短い悲鳴を上げるが、それもまたどうでもよかった。

「先輩？何処行くんですか先輩！？」

五月蠅い、黙れ。

怯えたように声を掛けてくる椎名ちゃんを無視して歩き出す。

探す、探す、探す

あの馬鹿が居ないなんてあるものか。泣いている妹をほっぽり出して何処か行くななんてあるものか。

どうせ近くでアホ面晒して気絶しているに決まっている。そうに違いない。

探す、探す、探す

周囲を、地面を、瓦礫の隙間を、風漬しに、見逃しが無いように

探す。

腕に走る激痛を、歯を食いしばって堪えて探す。何度も何度も瓦礫等に躓きながら、転びながら、形振り構わず探す。

ピョコピョコとツインテールを揺らして、涙声を上げながら付いてくる後輩が鬱陶しい 探す。

うるせえつつつてんだろ。犯すぞクソアマ 探す、探す、探す。

果たして、”ソレ”は其処にあった。

探し始めてどれ程の時間が経ったのか、実はそれ程経っていないのか。どれ程の範囲を探して回ったのか、巡り巡って漸く近くにあったソレを見つけたのか。確かにソレは其処にあった。

「
」

少し確認するだけで分かった。服は赤くて見間違いかとも思ったが、その手首に付けている銀のブレスレットは間違いなくアイツのものだったから。

誕生日プレゼントとして送った、正義の誕生石であるそれなりに高価なルビーをあしらったシルバーブレスレット。見間違えるはずも無かった。

「先輩？もしかしてお兄ちゃん見つけ ひっ。」

追いついた椎名ちゃんが、立ち止まっている俺に疑問を持ったのか、隣にやって来る。

そして、ソレを見て短く悲鳴を上げた。

確かに正義は其処に居た。いや、居たというより、”あつた”。クソツタレ、ふざけんなよクショウ。誰か嘘だといってくれ。

夢なら覚めてくれ。

俺は、右腕の肘から少し上までを失った。そして、そしてアイツは

右腕の、肘より少し先から全部失っていた。

「……嘘、いや、先輩嘘だよこれ。冗談だよね。」

ああ、是非嘘にでも冗談にでもしてくれ。悪趣味な悪戯でも構いやしない。怒るところか、全裸でカレー食いながら、スタイリッシュに三回転して肥溜めに飛び込んでやるよ。大歓迎だ。

気が抜けたように、膝を突いてしまった。震える腕でアイツだった物を手に取り、胸に抱く。

気付いた時にはもう遅い。世の中そんなものだ。

けど違った。俺は気付いた。気付いたんだ。自分の感情に気付いた、大切に思ってくれる友人に気付いた。気付いたから、これから始まる筈だったんだ。遅くなかった。間に合ったんだ。

けど実際は違った。世の中は気付いてしまったから終わりなんだ。きつとそうだ。気付いたからこそ、

正義はクソ垂れる暇無く死んで、俺はクソぶちまける程度絶望する事の時間を与えられた。無様に喚き散らす

世の中クソだ。もう何も考えたくなくて。頭の中が真っ白になって。でもこの胸の中のどす黒い感情は、行き場を無くしてのた打ち回って。だから、

「い、いや……お兄ちゃん。いや」

中略

建国暦2000年王国^{マクルト}の月24日 渡界者の世界では10月24日。

62代目マクルト国王フォルセティウス・マクルト・ユングヴィ
「アドナイメレクの妻にして稀代の大召喚師であるフレイヤ・マクルト・オメテオトル」アドナイメレクによって「大召喚」は引き起こされた。

その日、創造神エイン・ソフにより創られ、主アブラハムより平定されたこの地が穿たれ、彼らの「世界」は召喚されたのだ。

その日、彼らの世界は「死都」として終わりを迎え 「渡界者」となった彼らの物語は始まった。

歴史学者 サラスヴァティエ・ミーミル著 『大召喚』より一部抜粋

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0108v/>

ただそれだけの話

2011年12月5日11時53分発行